保育者養成校と保育現場の保育連携活動における現状と課題
――学生の実習とボランティアに関する調査――

三　澤　　恵

要　旨

本研究は，本学部の学生（191 名）の保育現場での実習不安とコミュニケーション不安、ボランティア経験について分析を行った。その結果，学生は専門知識や保育理解に不安が高く，保護者と乳児の対応において強い不安を感じていることが示された。ボランティアでは，就職希望に関係なく参加を希望している学生が多かった。今後，学生の意識や傾向を大学や保育現場と共有し，保育連携活動の協力と理解を深めていくことが重要である。

キーワード：保育者養成校，保育現場，保育連携活動

第 1 章　保育連携活動の現状

1.1　保育者養成校と保育現場の連携活動に関する先行研究

保育者養成校の学生における保育現場での実習やボランティアは，子どもとの関わりや保育者の専門性を学ぶ貴重な経験である。しかし，実習に対する不安が強い学生も多く，消極性や意欲が低いといった問題点が実習先から指摘されている。長谷部（2007）によると，学生の実習不安要素には「指導」，「人間関係」，「事前理解」，「活動内容」があり，不安の強い学生は実習前の見学やボランティアなどの保育実践に触れる経験によっても実習回避の抑止効果があると述べている。しかしながら，殆どの保育者養成校が実習を夏季・春季休業中に行うために，実習間近の学生は試験期間になり，保育実践の機会が得られなくなってしまう。また，普段の授業期間は過密な時間割によって，ボランティアを行う時間の余裕がない状況である。実習後に不安調査を行った大平ら（2009）は，不安を回避せずに実習経験を重ねていき，現実的に問題解決を図っていくことで不安は軽減されていくと分析している。つまり，保育者養成校と保育現場が連携し，学生の保育実践の機会を推進していくことが必要であると考えられる。そのために，本研究では先ず，本学部(※注)の学生の実習とボランティアに関する現状と不安要素を分析することを目的と

した。

（※本学部は4年制であり，小学校教諭，幼稚園教諭，保育士の資格取得が可能である。）

1.2　本学での保育連携活動の現状

本研究では，保育者養成校の学生が幼稚園や保育所などの保育現場で実践活動を行うことを保育連携活動とする。本学の保育連携活動は，1年次に週1回（計14回）希望の就職現場で体験学習をするフィールドワーク，2年次の交流活動（発表会2回），2～4年次の免許必修の教育実習と保育実習などがある。幼稚園や保育所などでのボランティアは学生の自主的な活動となっている。学生が初めて実習を経験する2年次までに，フィールドワークや交流活動の経験があるが，学生の実習に対する不安は耳にする。授業で保育の実践経験を増やすことも検討が必要であるが，授業内の活動には評価が伴う為，プレッシャーや不安も生まれるのではないかと考えられる。学生の実践経験の場を提供するには，授業だけでなく，学生の自主的なボランティアを支援する必要も感じられる。

第2章　目的

本研究では，2つの目的を立て，それぞれに以下の仮説を設定した。

第1の目的は，本学部の学生の実習不安要素と，乳幼児や保育者，保護者とのコミュニケーション不安の傾向を分析することである。

仮説1：学生は，保育の実践に関わる実習不安が高い。

仮説2：学年が高いほど，実習不安は低い。

仮説3：対人コミュニケーションにおいては，保育者に不安を感じている。

第2の目的は，本学部の学生の保育現場でのボランティア状況や就職希望との関連について調査することである。

仮説4：学年が高いほど，ボランティア経験の回数も多い。

仮説5：幼保就職希望の学生は，保育現場でのボランティア希望者が多い。

仮説6：保育現場での就職を希望する学生は，実習不安が低い。

第3章　方法

3.1　調査対象

本学の子ども学部1～4年生に質問紙調査を実施し，回答のあった191名（男性66名，女性125名）について分析を行った。学年別では1年生62名，2年生80名，3年生33名，4年生16

名であった。調査時期は，2015 年 7 月である。

3.2　使用尺度

質問紙調査項目は，いずれも幼稚園や保育所に関する内容で行った。

①学年・性別

②幼保就職希望（強く思う～全く思わない，　5 段階）

③ボランティア経験の回数

④幼稚園，保育所でのボランティアの希望の有無（5 段階）

⑤現在，ボランティアを行っているか（行っている or 行っていない）

⑥ボランティアを行っていない理由（9 項目，複数可）

⑦乳幼児，保育者，保護者とのコミュニケーション不安（強くある～ない，各 4 段階）

⑧コミュニケーション不安の理由（自由記述）

⑨実習不安（本多・櫻井，2011）25 項目について（非常にあてはまる～全くあてはまらない，6 段階）

第 4 章　結果

4.1　実習不安

実習不安については，25 項目を用いて因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った結果，本田ら（2011）の因子構造と同様の 5 因子構造がみとめられた。第 1 因子は，「緊張してあがってしまい保育がすすまなくなるのではないかと思う」「子どもたちに受け入れられるか心配だ」「子どもたちの前でうまく話せるか不安だ」などの 6 項目であり，子どもとの関係に関する不安の因子とした。第 2 因子は，「体力的にもつか心配だ」「体調が狂いそうである」などの 7 項目であり，実習継続に関する不安の因子とした。第 3 因子は，「保護者とうまく関われるか心配だ」「保育教材がうまくつくれるかどうか不安だ」などの 6 項目であり，保育の実践に関する不安の因子とした。第 4 因子は，「どんな服装がよいのかわからず不安だ」「服装がふさわしくないと注意されるのではないかと思う」などの 3 項目であり，身だしなみに関する不安の因子とした。第 5 因子は，「保育に必要な専門知識が不足しているかもしれない」「実習現場に適応できるか心配だ」などの 3 項目であり，保育現場への適応に関する不安の因子と解釈した。各因子の信頼性係数は，子どもとの関係 $\alpha = .92$，実習継続 $\alpha = .86$，保育の実践 $\alpha = .86$，身だしなみ $\alpha = .94$，現場への適応 $\alpha = .84$，が得られ信頼性が確認できたので，それぞれの下位尺度の平均値を算出した（Table1）。

Table 1
実習不安尺度因子の基礎統計（n=190）

因子名	α	平均値	SD
1. 子どもとの関係	.92	3.76	1.15
2. 実習継続	.86	2.85	1.07
3. 保育の実践	.86	4.19	0.99
4. 身だしなみ	.94	2.55	1.33
5. 現場への適応	.84	4.39	1.07

5因子のうち，平均値が最も高かったのは，現場への適応4.39（SD = 1.07），次に保育の実践4.19（SD = 0.99），子どもとの関係3.76（SD = 1.15），実習継続2.85（SD = 1.07），身だしなみ2.55（SD = 1.33）の順であった。

次に，性別の違いによる実習不安の平均値の差を分析した結果，子どもとの関係や継続不安については女性の方が平均値は高めであったが，いずれも有意な差はみとめられなかった（Table2）。

Table2
性別による実習不安の平均値の差異

	男性（n=64）		女性（n=125）			
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	F 値	p 値
子どもとの関係	3.55	(1.40)	3.87	(0.99)	11.18	*n.s.*
実習継続	2.67	(1.17)	2.94	(1.01)	3.07	*n.s.*
保育の実践	4.15	(1.19)	4.22	(0.87)	7.23	*n.s.*
身だしなみ	2.63	(1.30)	2.51	(1.35)	0.11	*n.s.*
現場への適応	4.27	(1.20)	4.45	(1.00)	1.84	*n.s.*

n.s.=not significant

また，学年の違いによる実習不安の平均値の差について分散分析を行った結果，身だしなみに有意な差がみられ（F (3, 184) = 3.10, p<.05），4年生よりも1年生の平均値が高いため，身だしなみに関する不安が高いことが示された（Table3）。

Table3
学年による実習不安の平均値の差異

	1年生（n=62）		2年生（n=80）		3年生（n=33）		4年生（n=16）			
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	F 値	多重比較
子どもとの関係	3.60	(1.07)	3.86	(1.31)	4.01	(0.89)	3.40	(0.98)	1.67	
実習継続	2.91	(1.01)	2.77	(1.15)	3.00	(1.11)	2.69	(0.76)	0.54	
保育の実践	4.19	(0.89)	4.25	(1.11)	4.36	(0.80)	3.59	(0.93)	2.42	
身だしなみ	2.89	(1.37)	2.55	(1.33)	2.20	(1.18)	2.00	(1.20)	3.10 *	4<1
現場への適応	4.26	(1.08)	4.45	(1.17)	4.63	(0.92)	4.08	(0.71)	1.36	

*:p<.05

4.2 乳幼児，保育者，保護者とのコミュニケーション不安

乳幼児，保育者，保護者とのコミュニケーションにおける不安を“強くある”（4点）～“ない”（1点）までの4段階で平均値を算出した結果，乳幼児不安2.54（$SD = 0.89$），保育者不安2.70（$SD = 0.83$），保護者不安3.24（$SD = 0.87$）であった。最も高かったのは保護者とのコミュニケーションにおける不安であり，保育者や乳幼児との不安も中点である2.5点を超えており，不安を感じていることが明らかになった。

次に，学年の違いによる各コミュニケーション不安について分散分析を行った結果，全てに有意な差がみられた（Table4）。乳幼児不安では，学年で有意な差（$F = 4.08$，$p<.01$）がみとめられたので，Tukeyを用いた多重比較を行った結果，3年生が1年生と4年生より平均値が有意に高く，乳幼児不安が高かった。保育者不安でも，学年で有意な差（$F = 8.13$，$p<.001$）がみとめられ，多重比較の結果，3年生と4年生が1年生と2年生より平均値が有意に高く，保育者不安が高かった。また，保護者不安でも有意な差（$F = 5.26$，$p<.01$）がみとめられ，多重比較の結果，1年生と3年生が2年生より平均値が有意に高く，保護者不安が高かった。コミュニケーションの不安感に関する自由記述には，乳児とのコミュニケーションの取り方が分からないという記述が多く，保育者にはどのように思われているか不安や怖さがあるという記述が多く，保護者には話しかけてよいのかといった会話やモンスターペアレントの対応などの不安に関する記述が多くみられた。

Table4
学年による対人コミュニケーション不安の平均値の差異

	1年生（n=62）		2年生（n=80）		3年生（n=33）		4年生（n=16）			
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	F値	多重比較
乳幼児不安	2.39	(0.88)	2.61	(0.95)	2.88	(0.70)	2.06	(0.77)	4.08**	1・4＜3
保育者不安	2.47	(0.67)	2.59	(0.90)	3.12	(0.78)	3.25	(0.58)	8.13***	1・2＜3・4
保護者不安	3.48	(0.72)	2.99	(1.00)	3.48	(0.67)	3.06	(0.77)	5.26**	2＜1・3

:$p<.01$，*:$p<.001$

4.3 ボランティアの経験と参加希望

学生が幼稚園や保育所で行ったボランティア経験の回数を，ボランティア経験無群（0回）とボランティア経験有群（1回以上）に分けたところ，ボランティア経験が無い学生は122名，ボランティア経験が有る学生は69名であり，60%以上の学生がボランティアを経験していないことが明らかになった。

また，学年によってボランティア経験の有無に差があるかχ^2検定を行ったところ，有意な差がみられ（$\chi^2 = 10.903$，$df = 3$，$p<.05$），3年生と4年生のボランティア経験有群はボランティア経験無群よりも有意に多いことが明らかになった（Table5）。この結果から，3年生以上になると，ボランティア経験をする学生が多いと推察される。

Table5
学年とボランティア経験の有無のクロス表

	ボランティア経験				調整後の残差	X^2 検定
	無（n=122）	(%)	有（n=69）	(%)		
1年生（n=62）	43	(69.4)	19	(30.6)	1.1	.012*
2年生（n=80）	57	(71.3)	23	(28.8)	1.8	
3年生（n=33）	16	(48.5)	17	(51.5)	2.0*	
4年生（n=16）	6	(37.5)	10	(62.5)	2.3*	

*:p<.05

ボランティアを行っていない理由について，9項目から複数回答を求めた結果，“授業で時間がない”57.6%と最も高く，次に“アルバイトで時間がない”45.5%，“一人では行きづらい”30.4%という回答が多かった（Table6）。

Table6
ボランティアを行っていない理由の割合（複数可）

質問項目	人数（n=191）	(%)
①授業があって時間がない	110	(57.6)
②アルバイトがあって時間がない	87	(45.5)
③行きたい場所がない	14	(7.3)
④行ける場所が近くにない	29	(15.2)
⑤行くのが面倒である	9	(4.7)
⑥興味がない	11	(5.8)
⑦一人では行きづらい	58	(30.4)
⑧行くのが不安	16	(8.4)
⑨その他	25	(13.1)

“幼稚園や保育所でのボランティアに参加したいと思いますか”という質問について，“強く思う”“少し思う”と回答した学生を「ボランティア希望有群」（n=148），“どちらでもない”と回答した学生を「どちらでもない群」（n=27），“あまり思わない”“全く思わない”と回答した学生を「ボランティア希望無群」（n=14）と分類した。次に，“幼稚園や保育所に就職したいと思いますか”という質問について，“強く思う”“少し思う”と回答した学生を「就職希望有群」（n=100），“悩んでいる”と回答した学生を「悩んでいる群」（n=54），“あまり思わない”“全く思わない”と回答した学生を「就職希望無群」（n=35）と分類した。幼稚園や保育所でのボランティア希望と，幼稚園や保育所の就職希望についてクロス集計した結果，「就職希望有群」の学生のうち，「ボランティア希望有群」の学生が90%，「どちらでもない群」の学生が9%，「ボランティア希望無群」の学生が1%であった（Table7）。就職を「悩んでいる群」の学生のうち，「ボランティア希望有群」の学生が76%，「どちらでもない群」の学生が22%，「ボランティア希望無群」の学生が2%であった。「就職希望無群」の学生のうち，「ボランティア希望有群」の学生が

49%,「どちらでもない群」の学生が 17%,「ボランティア希望無群」の学生が 34% であった。「就職希望有群」の学生はボランティアの参加希望率も高いが,「就職希望無群」の学生でも約半数がボランティアの参加を希望していることが明らかになった。

Table7
幼保ボランティア希望と幼保就職希望のクロス表 (単位:%)

	ボランティア希望有 n=148	どちらでもない n=27	ボランティア希望無 n=14	合計
就職希望有	90 (90.0)	9 (9.0)	1 (1.0)	100
悩んでいる	41 (75.9)	12 (22.2)	1 (1.9)	54
就職希望無	17 (48.6)	6 (17.1)	12 (34.3)	35

4.4 幼保就職希望と実習不安の関連

学生の幼稚園や保育所での就職希望の各群と実習不安の関連をみるために分散分析を行った(Table8)。その結果,子どもとの関係($F = 6.88$, $p<.01$),実習継続($F = 8.47$, $p<.001$),保育の実践($F = 6.90$, $p<.01$)において有意な差がみとめられ,Tukey を用いた多重比較の結果,悩んでいる群が希望有群と希望無群の値より有意に高かった。また,身だしなみ($F = 3.87$, $p<.05$),現場への適応($F = 4.65$, $p<.05$)にも有意な差がみとめられ,多重比較の結果,悩んでいる群が希望有群の値より有意に高かった。これらの結果から,幼稚園や保育所への就職を悩んでいる学生は,実習における子どもとの関係,実習継続,保育の実践について就職希望の有る学生や希望の無い学生よりも不安が高いことが示された。また,身だしなみと現場への適応においては,悩んでいる学生は希望の有る学生よりも不安が高いことが明らかになった。

Table8
幼保就職希望別による実習不安の平均値の差異

	希望有 (n=100)		悩んでいる (n=54)		希望無 (n=35)			
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)	F 値	多重比較
子どもとの関係	3.62	(0.97)	4.23	(1.08)	3.46	(1.52)	6.88**	有無 < 悩
実習継続	2.64	(0.95)	3.35	(0.97)	2.71	(1.32)	8.47***	有無 < 悩
保育の実践	4.07	(0.86)	4.61	(0.82)	3.93	(1.36)	6.90**	有無 < 悩
身だしなみ	2.32	(1.25)	2.93	(1.28)	2.69	(1.56)	3.87*	有 < 悩
現場への適応	4.22	(0.95)	4.76	(1.03)	4.32	(1.35)	4.65*	有 < 悩

*:$p<.05$, **:$p<.01$, ***:$p<.001$

第 5 章 考察と結論

5.1 実習不安と対人コミュニケーション不安における考察と結論

本研究では,第 1 に本学部の学生を対象とした保育現場での実習不安と乳幼児,保育者,保護

者とのコミュニケーション不安について明らかにすることを目的とした。実習不安の各尺度項目の因子分析を行い，子どもとの関係，実習継続，保育の実践，身だしなみ，現場への適応の5因子が抽出された。次に，各尺度得点の平均値を算出したところ，最も高かったのは現場への適応4.39（$SD = 1.07$）であり，次に保育の実践4.19（$SD = 0.99$）が高かった。この結果から，学生が実習での未知の経験や評価に対する不安を感じていることが考えられるため，仮説1で挙げた保育の実践に関わる実習不安が高いことは支持された。また，各項目から保育現場に必要な専門知識や保育理解において強い不安を感じ，保育教材の準備や保護者対応などの保育技術においても強い不安を感じていることが示された。学年による実習不安の得点を比較した結果，身だしなみにおいて有意な差がみられた。このことは，学年が上がるにつれて実習経験が増すため，身だしなみに関する不安が軽減されたのだと考えられ，仮説2の学年が高いほど，実習不安は低いことは一部支持された。

保育現場における乳幼児・保育者・保護者とのコミュニケーション不安については，最も高かったのが保護者不安であり，保育者不安や乳幼児不安も中点以上あり，不安があることが示された。自由記述では，乳児とのコミュニケーションの取り方が分からないという記述が多く，乳児と接する経験の少なさが，3年次の保育実習前に不安となっているのではないかと感じられた。また，保育者にはどのように思われているか不安や怖さがあるという記述が多く，学年が高いほど不安の割合も高くなっていたが，このことは実習をするにつれて指導をする保育者を意識してきているのではないかと考えられる。保護者には話しかけてよいのかといった会話やモンスターペアレントの対応などに関する不安の記述が多くみられたが，日常での会話経験の少なさやメディアなどによるモンスターペアレントの情報が関連して高くなっているのではないかと予想される。これらの結果から，仮説3の対人コミュニケーションにおいては保育者に不安を感じていることは支持されなかった。

5.2　学生の保育現場でのボランティアや就職希望との関連についての考察と結論

本研究の第2の目的は，本学部の学生の保育現場でのボランティアや就職希望との関連についての調査である。ボランティアの経験回数を尋ねたところ，経験の無い学生が60%以上であった。活動できない理由として，授業やアルバイトで時間がないと回答した学生が多かったことから，学生のボランティアを支援するためには大学のカリキュラムの検討が必要であると考えられる。また，一人でボランティアに行きづらいと回答した学生が不安なくボランティアを行うためには，複数の学生で活動できるサークルを作ることが有効ではないだろうか。そして，ボランティアが1回で終わらずに継続して行えるように支援することも重要である。次に，学年によってボランティア経験の有無に差があるか χ^2 検定を行ったところ，3年生以上になると，ボランティア経験をする学生が多いことが明らかになった。この結果から，仮説4の学年が高いほど，ボ

ランティア経験の回数も多いことは支持された。しかし，縦断的研究でないため，学年が上がるとボランティア経験が増えると解釈することはできないが，3年生以上になると授業の時間割が少なくなる学生もいるため，ボランティアをする時間ができるのではないかと考えられる。

幼稚園や保育所での就職希望とボランティア希望の割合については，就職希望の有る学生のうち，ボランティアの参加希望の学生が90%であったため，仮説5の幼保就職希望の学生には，保育現場でのボランティア希望者が多いことについては支持された。しかし，就職希望の無い学生や悩んでいる学生でも，ボランティアの参加を希望している学生はいることが確認された。就職希望の有無と関係なく，子どもと関わる経験を求めている全ての学生が参加できるように呼びかける必要がある。

次に，幼保就職希望別による実習不安平均値の比較を行ったところ，子どもとの関係，実習継続，保育の実践の不安は，就職の是非を悩んでいる学生が，希望の有る学生や無い学生よりも高かった。また，身だしなみ，現場への適応の不安は，悩んでいる学生が希望の有る学生よりも高かった。これらの結果から，仮説6の保育現場での就職を希望する学生は，実習不安が低いということは支持されなかった。幼稚園や保育所での就職を悩んでいる学生の実習不安が高かった要因としては，入学時の保育職の理想と現実の違いに自信や意欲を無くし，進路に悩む中で実習に行くことが，不安を高めているのではないかと推察される。

おわりに

現代の少子化の影響などで，学生は子どもと接する機会が減少している。その為，保育の実践や現場への適応，対人コミュニケーションなどにおける不安を感じやすいと推察される。このような学生の現状を理解し，安心して学べる保育実践の環境を保育現場と連携して作っていくことが重要である。その為に，今回の調査の結果を本学の付属幼稚園と共有し，学生の自信を育てるための保育現場でのボランティア，大学や地域の子育て支援施設での交流会などの保育連携活動に関するアドバイスを頂いた。

大学としての1点目の課題は，継続的なボランティアの時間を確保するためのカリキュラム編成や体験授業の検討である。2点目は，学生が複数の人数で参加できるボランティアサークルを発足することである。3点目は，年間を通じた大学と保育現場の交流企画を作成することである。4点目は，学生の対人コミュニケーション不安の高い保護者や乳児の参加している親子サークルなどでのボランティアを推進することである。今後の研究の課題としては，保育連携活動の効果の分析である。また，上記の課題に取り組むためには，今後，学生の意識や傾向を大学と保育現場が共有し，保育連携活動の協力と理解を深めていくことが重要である。

参考文献

大谷彰子・平化恵美子（2012）．保育者養成課程における実習に対する課題と不安の変容「甲子園短期大学紀要」30，67-73

大平泰子・開仁志（2009）．幼稚園教育実習生への指導のあり方に関する一考察～実習生の不安や悩みを中心に～「富山短期大学紀要」44，73-79

開仁志・大平泰子（2009）．幼稚園教育実習生への指導のあり方に関する一考察～実習現場における指導の実態を中心に～「富山短期大学紀要」44，63-72

中西 和子（2008）保育実習における不安の変容に関する一考察（1）「日本教育心理学会総会発表論文集」(50)，265

長谷部比呂美（2007）．保育実習に関する学生の意識について：実習不安を中心として「淑徳短期大学研究紀要」46，81-96

本多潤子・櫻井登世子（2011）．幼稚園教育実習における実習不安の類型とその特徴．「田園調布学園大学紀要」(6)，49-60

森脇裕美子・島崎保・高橋 秀典・井上 光一・植田 有美子・中 磯子・田中 麻貴（2008）より有意義な保育実習の実現に向けて1：保育実習における実習生の不安に関する研究 「日本教育心理学会総会発表論文集」(50)，268